

フランツ・エッケルトの長女アマーリエの自伝から読み取れるもの

ゴチェフスキ, ヘルマン(東京大学)

フランツ・エッケルト(1852- 1916)は、日韓近代音楽史に西洋音楽を伝えた御雇外国人として知られている。その長女アマーリエ(1876- 1969)は、父がヴイルヘルムスハーフェンの海軍軍楽隊に入隊した年にエッケルト家の最初の子供として生まれた。その後、エッケルトが家族をドイツに残して日本に行っていた最初の3年間と韓国に行っていた最初の1年間を除いて、28歳で結婚するまで父と同居していた。結婚してからもソウルで両親の家近くに住み、晩年の父の介護にも関わり、亡くなる1916年8月6日にも父の側に居た。つまりアマーリエは、自身の母親を除いて、エッケルトの生涯をもっとも長い間もっとも身近なところから経験した人物である。

アマーリエの自伝の存在は、最近まで音楽研究者に知られていなかった。晩年アメリカに暮らしていたアマーリエはそれを英語で残したが、個人の手において、簡単にアクセスできない状況であった。しかし昨年(2019)の12月に、韓国の近代史を研究しているアレクサンダー・クナイダーが、エッケルト家に関する研究の一部としてアマーリエの自伝の全文を公開した。英語で書かれた著作ではあるが、現在韓国語訳でしか出版されていない。英語での出版も計画されているが、出版社は未定である。

自分の人生についての記憶話であるから、アマーリエは父の職業についてほとんど言及していない。また、彼女自身はピアノが上手で父との室内音楽などにも加わったことがあるにもかかわらず、それについての記述も極めて少ない。その「極めて少ない」情報もところどころで今までのエッケルト像を訂正するものではあるが、それよりもエッケルト家の私生活と子供達の教育についての記述が興味深い。エッケルトは自宅でどのような人間であったか。夏休みをどのように過ごしたのか。どのような人々と個人的な交際があったのか。今回の発表では、この自伝をもとに、他の文献も用いて補いながら、一人の御雇外国人の暮らしを描いて見たいと思う。